

マリみて／ゼロ 第二章番外編『種明かし』

先日の紅薔薇さまと蓉子さんの将棋対決、白薔薇さまのくしやみというアクシデントが起きたからこそその勝利だと思っただけけれど、瑞佳さんはあそこまで計算してたのだからか偶然にしては出来すぎている。

「瑞佳さん、この前の将棋対決でアップルパイを持ってきたじゃない。あれって、くしやみをさせるため？」

瑞佳さんは、一瞬何のことって顔になってから、いつものように笑顔でこう言った。

「そうなの」

「どうやったたら、そこまで予想できるわけ……」

本気で驚いていたら、瑞佳さんはクスツ笑って冗談よと否定した。

「いくら私でも、そんな器用なこと出来ないわよ。ただの差し入れよ」

「本当に？」

私が疑惑の目で見ていたら、仕方ないわねと真相を教えてくれることになった。

「賄賂よ」

「わ、ワイロ？」

「昔から賄賂は山吹色のお菓子って相場が決まってるの」

山吹色のお菓子って、小判って意味じゃなかったっけ。

「アップルパイはお姉さまの好物だから、それに免じて許してもらおうつもりで持ってきたの」

「それなら、勝負の前に言えばよかったんじゃない？」

「そんなことしたら逆に機嫌を損ねてしまうわよ。お姉さまが求めているのは余興なの」

「余興って……」

「面白ければいいのよ」

「そういうものなんだ」

「まあ、白薔薇さまのくしやみには色々な意味で驚かされたけどね」

「あれは私も驚いた。見ていただけでも面白かったよ」

「肴にするためにも、印象に残すのは大切よ」

そう言われて気が付いたのだけど、思い出話に花を咲かせようと思ったとき、普通に蓉子さんを迎え入れていたら出来なかったんじゃないかって。

大切な人だからこそ、印象に残る形で受け入れるべきなんだと。そう思った。

その日の放課後。校舎を出ようとした際、スカート下のポケットに何か入ってることに気が付いた。

それは、お昼に食べたサクランボの種だった。ティッシュにくるんだまま捨て忘れてポ

ケットに入れっぱなしだったのだ。

「そうだ」

私は講堂の裏に一本だけある桜の木の近くに移動して、適当な場所にちよつとした穴を掘った。

「多分、可能性は無いと思うけどね」

サクランボの種を穴に入れて、その上にそつと土を被せた。

「万が一、芽が出て、桜の木になれば、あなたの仲間が増えるわよ。きつと素敵な親友か恋人になるわ」

桜の木にそう話かけて、私はその日帰宅した。

可能性というものは全てゼロとは限らないのだから。